

名古屋絵付けの伝統技法について

名古屋陶磁器会館を拠点に取り組んでいる名古屋絵付けの伝統技法の「凸盛り」についてご紹介します。「凸盛り」技法の継承には、CDAの陶磁器絵付けのワークショップの講師をしていただいている当協会の安藤栄子さんと杉山ひとみさん(写真1)が携わっています。お二人は、名古屋陶磁器会館の文化事業「技の伝承」のサポート役として2013年に結成された「なごや凸盛り隊」の中核メンバーとして活躍されております。私自身も昨年の2月に名古屋陶磁器会館で行われた、「名古屋絵付け～現在・過去・未来～」

イベントの講演・シンポジウム(写真2、3)の講師を引き受けたことが縁となり、「凸盛り」技法の伝承活動には、大変関心と興味を持ちました。今回の会員つれづれ原稿の作成に当たっては、多数の資料や画像データを安藤さんと杉山さんから提供して頂くとともにアドバイスも多々いただきました。このブログの場をお借りしてお礼申し上げます。



(写真1) 左 杉山ひとみさん、右 安藤栄子さん



(写真7)



(写真8)



(写真2)



(写真3)



(写真4)



(写真5)



(写真6)

「凸盛り」技法とは、「イッチン」と言われる絞り出し道具(真鍮製の先金)を使用して陶磁器面に加飾するもので、伝統的な名古屋絵付けの技法として現在まで伝えられています。「イッチン」による装飾技法は、他の陶磁器産地でも使われている加飾方法ですが、名古屋絵付けの「凸盛り」は、二重盛りを施すことが大きな特徴となっています。「凸盛り」のモチーフは、いろいろとありますが、中でも「竜」が名古屋絵付けの代表的なモチーフとして知られ継承されてきています。昭和の終わりごろまで名古屋市東区周辺には数多くの工房があり、たくさんの絵付け職人が活躍していました。しかし今では、名古屋絵付けの「凸盛り」技法を継承して絵付けを行っているのは、現在85歳になられる高木はる糸さん(写真4)お一人になってしまっています。

こうしたことから、CDAの安藤さん、杉山さんは、名古屋陶磁器会館を活動拠点とする「なごや凸盛り隊」を結成し、技術の伝承と体験型講習会等で一般の方々への普及に努めておられます。(写真5、6)もともと安藤さん、杉山さんも陶磁器絵付けデザインのキャリアは長く、お二人とも厚生労働省認定の陶磁器上絵付け1級技能士として資格を有し企業等での実績も数多く持っています。(写真7、8)そんなお二人が、凸盛りの加飾技法を学び、後継者の育成に努めながら、陶磁器製品に新たな発想とデザイン展開により名古屋陶磁器に新しい方向性を出すため活動されています。



(写真9)



(写真10)

伝統的な凸盛り技法

絵具を入れて描くための道具として、紙で作られた「カップ」と呼ばれる円錐形の筒の先端に「イッチン」をつけて、筆の代わりにこれで描いていく技法です。

アルミナの微粉末にガラスの粉を混ぜた加飾材の「台白」に布海苔と水を加えてつくる盛り絵具を「カップ」に入れて、竜などのモチーフを盛りつけて描いていきます(写真9、10)。名古屋絵付けの凸盛りには、加飾した台白が乾かないうちにガラス粉(直径0.6mm)を上からふりかけて付着させ、加飾するという「ガラス盛り(コラレン)」と呼ばれる技法にもその特徴が示されます。名古屋絵付けのモチーフは数多くありますが、縁起が良いことと輸出品として外国から好まれていたため竜のデザインが広く普及して使われるようになったといわれています。

名古屋絵付けの伝統技法について

New凸盛り

陶磁器の表面にレリーフや表面のデザインに凹凸を付けた製品は、イギリスのウエッジウッド社のジャスパー製品、ドイツのローゼンタール社の魔笛シリーズなどにも見られるが、安藤さんや杉山さんは、これまでの「凸盛り」の伝統的な技法の特徴を生かして、新たな視点から表現し、「凸盛り」技法を使った陶磁器製品の魅力を発見、感じとってこうとしています。そうした作品作りの活動をご紹介します。

1、「若沖プロジェクト」 作品試作の取り組み

「凸盛り」で使われる「ガラス盛り(コラレン)」技法を使って、日本画の伊藤若沖作品の一部をトリミングして直径40cmの大皿に展開した作品(写真11、12)。お二人とも日本画での表現と陶磁器での表現は異なるため大変苦労されたようです。陶磁器の場合、釉薬の色は焼成温度の違いにより発色が微妙に異なるため、顔料の性質や焼成の条件を考慮しながら多くの焼成実験等の結果を踏まえて日本画から新たな「名古屋絵付け」の作品となった大皿。



(写真11)



(写真12)

2、巨大なサイズの「招き猫」

この「招き猫」作品(写真13、14)も、「凸盛り」で使われる「ガラス盛り(コラレン)」技法を使ってデザインされており、随所に「凸盛り」ならではの加飾技法が生かされた作品となっている。一般的な釉薬による上絵付け表現だけでは見られない、光沢面とレリーフ状になったマット釉の絵柄が作品に重厚感と存在感を出しているといえる。



(写真15)



(写真13)



(写真14)

3、お二人の作品

「凸盛り」技法を使ったお二人の作品は、この他にも蓋物(写真15)や透かし彫り蓋物(写真16)など、多数あります。

伝統的な名古屋絵付けの「凸盛り」技法の伝承に腐心するとともに、「凸盛り」技法の今日的な価値の創造のため、様々な陶磁器製品に展開して日々努力されているエールを送る意味から今回のブログでご紹介させていただきました。

最後に、お二人からそれぞれの「凸盛り」にかける想いを掲載させていただきます。



(写真16)



テレビ取材を受ける「凸盛り」技法の実演中の高木はる系さん



名古屋陶磁器会館での講習会で絵付け指導

◆ 安藤栄子さんのコメント

今回のCDAブログでご紹介いただきましたこの凸盛り技法は、大変珍しく中でも「ガラス盛り(コラレン)」は、光をあてると立体的に浮き上がりキラキラして非常に美しいのが特徴です。ここ中部地方は陶磁器産業が盛んで、名古屋の凸盛り技法が途絶えてしまうことは大変残念なことです。そこで、技法を一から教えていただき、上絵付け作品に取り入れていく新たな試みをはじめました。しかし、なかなか思い通りに行かず現在も奮闘中です。

また、CDAの会員活動紹介パネル安藤出品作品(写真16)でも、凸盛り作品を取り入れて紹介する機会を得ました。これからもデザインや技を追求し、凸盛り技法を守り伝えていく活動を続けていきたいと思っております。

◆ 杉山ひとみさんのコメント

この度は「凸盛り」を中心とする「名古屋絵付け」をまもりつたえる活動をCDAブログでご紹介いただき、誠にありがとうございます。

2013年から、文化庁の芸術支援を受け、「名古屋文化遺産活用実行委員会」の皆さまと共に、時代と共に失われつつある卓越した職人技の伝承・発展を目指すという活動を行っています。名古屋絵付けの魅力的な「技」の代表「凸盛り」がここで消えてしまうのは、ただただ「もったいない」、という想いが活動の原動力となっています。

まずは、「New凸盛り」作品発表を通し、「名古屋絵付け」の認知度を高めることを目指しております。参加させていただいたCDA会員活動展杉山出品作品(写真17)では、あまり知られていない「名古屋絵付け」の存在や、それをまもりつたえる活動の一端を知っていただくことができました。また展示を通し、会員の皆さまのご活躍から多くを学ぶことができました。

今後とも、デザイン力を磨く努力を続け、伝統の技を現代に生かすことができるよう、地道に作品制作を続けて参ります。引き続きご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

もりもと けん
森本 健

中部デザイン協会 理事長
中部デザイン団体協議会事務局長
名古屋学芸大学名誉教授

得意分野 / デザイン振興事業の企画・推進、グラフィックデザイン

[略歴] 1945年愛知県名古屋市生まれ。1969年愛知教育大学教育学部美術科卒業。愛知県庁入庁。愛知県職員としてデザイン振興施策に携わり1986年の世界デザイン会議(ICSID89Nagoya)、世界デザイン博覧会の開催事務を推進。その後瀬戸窯業技術センター、国際デザインセンター(出向)、工業技術センター勤務を経て世界グラフィックデザイン会議開催運営会(出向)を最後に愛知県退職。2004年名古屋学芸大学デザイン学科教授、2011年4月客員教授、キャリアサポートセンター参与